

テニス小史

テオ・シュテムラー

経遠 雄三¹⁾・大家 一²⁾ 訳

1) 倉敷芸術科学大学生命科学部

2) 倉敷芸術科学大学学習支援センター

(2011年10月1日 受理)

初めに

何となく上流階級のスポーツというイメージのあったテニスが爆発的に庶民の間にも普及することになったのは、昭和33年(1958年)、まだ皇太子時代の平成天皇と今は皇后となられた正田美智子さんとの婚約発表後ではなかっただろうか。お二人が知り合われたきっかけがテニスだったため、新聞や週刊誌は「テニスコートの恋」と大きな見出しを掲げ、その「シンデレラ物語」にあやかりようと特に若い女性に人気のスポーツとなったのである。これに若い男性たちが応じない筈はない。競技人口が増えれば切磋琢磨し合って当然実力も高まる。ほどなく好事家たちの楽しみの枠を破って本格的なプレイヤーが続出、沢松順子・和子姉妹に続いて伊達公子さんや杉山愛さんのように国際的な活躍で名声が定着する時代にまでなっている。

だから今やテニスは、本人が日常的にプレイするしないに関係なく、ウィンブルドンや全米オープンなどでの著名選手の活躍をテレビや新聞で目にして、国技化している野球と余り変わらないくらい馴染みのスポーツとなっているのだが、案外知らないのがその前史である。例えばソフトテニス。ゴムボールを使用する、いわゆる軟式テニスは日本生まれだという事実すら知らない人は少なくない。知ろうと知るまいと楽しめばよいのだという考え方も無論一つの態度だが、或る程度競技年令を重ねて、軟式から硬式に変わろうかというような時など、何故こんなになっているのだろうと不審に思うきっかけがある。そうになると配点の方法がどうも不合理に見えてきたり、ラヴという言葉がひっかかってきたり、過去を探ってみたくなる。そんな時にこれも気がつく、テニスの技術指導に関する本や有名プレイヤーの経験に基づく注意点を記述した参考書は夥しく出版されていて、良書も少なくないのだが、気軽に手にとって読み下せるテニス史の類は非常に少ないのである。

例えば日本にテニスが伝えられたのは、明治11年(1878年)にアメリカ人のリーランドという人が文部省(今の文部科学省)の招きで体操教師として赴任、ローンテニスを紹介したのが始まりだそうである。その前にすでに横浜や神戸に居留の外国人によって行われていて、1876年には横浜で公式試合が開催されたというから、外国人の来日が即日本のテニスの開始と考えてよいようである。見物していた日本人も好奇心をつのらせてすぐ

に始めたに違いないからである。しかしそれでも困ったことがあった。当時のことからボールの形すら珍しいのに、それを手に入れる、或いは代用品でも作り出すのに苦労したのである。イギリスからの輸入は容易ではなかった。というわけで安価なゴムボールを使い始めたのが軟式テニスの始まりだそうだ。窮すれば通ずというところか。今ではこれが世界各地で広まっているというから面白い。

というわけで、およそ140年近くの歴史を持つ日本のテニスだが、実はその前のヨーロッパでの歴史ははるかに長い。その長い時間を通してただ直線的に伝えられ、楽しく発展して来たのではなく、今日に至るまでその運命に結構浮沈があり、歴史上の様々な事件と絡んで政治的、社会的な影響を蒙りながら性格づけがなされて来たらしい。そういう、ともすれば無味乾燥になりがちな史的事実の流れを興味深く辿ったのが本稿の基となった『テニス小史』(Kleine Geschichte des Tennisspiels 1988)である。その道の専門家はともかく、通常のテニス愛好家には思いがけない出来事も解り易く沢山紹介されている。

著者のテオ・シュテムラー (Theo Stemmler 1936) は、ドイツ・マンハイム大学名誉教授で、本来は英文学専攻だが、色々な分野で活躍、創作もあって、1990年来ドイツ・バンクラブの会員でもある。以下その多彩な著作活動の一部を挙げる。

英文学関係

英語の第一アクセントを有する母音の発展 (1965)

礼拝式と宗教劇 中世演劇の現象形態研究 (1970)

中世英語の恋愛叙情詩 (1975)

翻訳

ハインリッヒ三世のアンナ・ボライエンに宛てた恋文 (1988)

エドワード・リヤーの全五行俗謡^{ライムリツク} (2008)

学術的な内容の大衆向け解説

騎士ジョン・マンデヴィルの約束の国旅行：インドと中国 (1966)

ハインリッヒ三世・ある王の見解 (1991)

特に幅広い層に向けた案内書で知られる。

サッカー小史 (1998)

シュテムラーの文体論。間違った言い方と正しい言い方 (1994)

ドゥーデン：アイスバインが辞典の一項目となったわけ (2007)

創作

トゥーレへの帰還。静夜曲 (1992)

その他

シュピーゲル誌への文芸批評寄稿

フランクフルター・アルゲマイネ新聞コラムニスト

テオ・シュテムラー・ジャズカルテット・バンドリーダー・ピアニスト

中世における始まり

最初は今とは全然違っていた—そしてその後も長く。つまりテニスは大衆スポーツではなく、僧侶と貴族という上流階級が独り占めしていたのである。修道院の庭で発生したのではあるが、間もなく貴族階級に独占されることとなった。テニスの初期におけるプレイヤー、つまり貴族たちの名で名簿は占められていた。

次の事実も思いがけないことであろう。テニスはイギリスの発明ではなく、フランス人の手によって作られたことである。まあほとんど全ての種類のスポーツ活動はイギリスが発展させ、ルール体系も彼らに帰着する—大抵の場合は当たっている—としてよいのであるが、ところがホッケーとゴルフがイギリスではなく、中国とスコットランドに由来するのと同様に、テニスについては—ウインブルドンが存在がありはするが—スポーツ狂いのイギリス人ではなく、よりにもよってあのフランス人、ブリトン人（つまりイギリス人）がドイツ人にユーモアの才を認めないのと同じくらい、スポーツの才能がないと思っているフランス人のおかげなのである。もっとも「スポーツ」という言葉はフランス語に由来するということが我々に注意を促していたはずではあるが…ブリトン人には謙虚になりなさいと。しかしイギリス人の手になる現代テニスの奇妙な所もある規則と寸法を、フランス人たちですら、彼ら独自の合理的明晰性^{クララテ}¹⁾によって定めた取り決めと取り替えると主張するほど、自分たちの国民的スポーツを率先してやりたがっているわけではない。そうやっていたら、つまり、もし大陸の連中のメートル法によるシステムが、この白いスポーツといわれるテニスへも適用されていたら、恐らくあらゆるテニスファンが—とりわけ競技場の管理者が歓迎したであろうのに。イギリス人が23,77メートル×8,23メートルというテニスコートの寸法を、あるいは56,7グラムというボールの重量を、ともかく自分たちのきばつなものに対する好みに合っているのだから、魅力的だと思っているのに対して、大陸のプレイヤーたちは自分たちの好みからすると、むしろ嫌悪を感じているのである。だって何しろ、ひょっとすると、ある日ウインブルドンにフランス人の侵入者たちが座り込んで、セーヴルの原メーター²⁾をテニスにも認めよという要求を掲げた天幕を張る可能性だってあるのだから。

私たちはこのスポーツの700年の歴史を先に急ぎすぎてしまったようだ。時間の機械のねじを13世紀に巻き戻そう。するとフランス北部の沢山の修道院の中庭で、僧侶たちが後のテニスに似た球技をやっているのが見える。修道士たちのこのような世俗的な運動に驚く人は少なくないであろう—間違った驚きだが。つまり修行僧たちも時にはベネディクト派の規則「祈れ、^{レコウ}而して働け」(Ora et labora)から休暇を取る権利を持っていたのだ。

ちなみに復活祭の宗教上の慣習から中世の修道院で原テニスが発生したと主張する歴史

家は少なくない。そしてこの慣習は他方で異教の豊饒信仰に遡るといふのだ。復活祭についての当時の若干の資料はテニスのボールとラケットが関わりありと報告しているのだが、この理論はほとんど根拠がない。例えば、15世紀と16世紀にはオルレアンの大司教とサント・クロワの修道参事会との間で復活祭に贈り物の交換が行われていた。即ち参事会員たちは一羽の鳩をもらい、彼らの方は大司教に2本のテニスラケットと何個かのボールを差し上げたのである。この贈り物の宗教上の象徴性については、今日では僅かに部分的にしか判らない。鳩では聖霊が意味され、ボールでは(神に支配された)世界が意味された — だがテニスラケットでは何が意味されたのか。「ラケットの引き渡し」(redevance des raquettes) というこのフランスの儀式は、15世紀のイギリスの神秘劇³⁾で羊飼いたちが幼児キリストに手渡す贈り物を思い出させる。即ち一羽の鳥、及び象徴でもあり、遊技の器具でもあるテニスのボールである。羊飼いはキリストにこれでテニスをするよう要請するのである。

私はあなたにボールしか持って来ていない。

これを手に取って遊び、

テニスをしに行かれるように!

北フランスに普及した今日のテニスの前の形は、カッシュ (cache) と呼ばれていた…「狩りをする、捕獲する」の意味のラテン語 *capitiare* のピカルディー方言である。(英語の *catch* も同語源) この球技が14世紀以来、非常に流行したフランドル地方では *cache* が *caetsen*、今の *Kaatsen* となった。13世紀以来、この遊びはスコットランドに広がり、*caiche* と呼ばれた。カッシュの遊び方はどうだったか? 同時代の資料が乏しくて、しばしば不正確なので、この原テニスの規則はおおよそしか再現できない。だが確かなのは、15世紀の末までは手で打っていて、時には手袋で堅いボールから護ることもあったことである。ラケットはやっと1495年になって名前が出てくる。そこからフランスでは(北部以外は) さし当たり普通の名称 *jeu de paume* — 手のひら球技 — (*paume* はラテン語の *palma* に由来する) が出てくる。

更に立証済みと考えられているのは、サーヴは長い方の屋根を目がけて打たなくてはならなかったことである。この規則の理由ははっきりしない — しかし、その発生は中世の回廊の構造を見れば判る。この修道院の増築部分に特徴的なのが、柱に支えられている傾斜屋根である。僧侶たちが中庭をテニスコートにした時、彼らは回廊の屋根を競技の中へ含めたのである。そしてこの球技が修道院の領分から離れた後になっても、長い間この屋根はゲーム開始の面として保持され、種々に形を変えて続けられたのである。これはその時代の沢山の描写から見て取れる。

ちなみに古代風に行う *real tennis* では、今日でも屋根を的としてサーヴを打つ。

球技をしていた坊主たちは長くお互いのもとに留まっていた。だからすぐに他の社会階層の者たちもこの新しい気晴らしを我がものにしてしまった。きっと社会的に

色々な素性の修道院生たちもカッシュ球技に参加して、修道院の塀の外にも広めたのだ。市民や農夫たちは競技場を探すのに苦労したに違いなかった。

寓意に満ちたある『カーツ球技の倫理的考察』(Kaatspel Ghemoralseerd 1431)の中で、フランドルの法律家ヤン・ヴァン・デン・ベルゲーは当時の市民たちでカッシュ競技をする者の困惑を叙述している。

「そういうわけで競技者たちは通常、よい平らな競技場を探すのである。」

(So pleghen de speelders te zouchene eene goede behouwelike stede omme te speelne)

特に競技者たちは「よい高い屋根」(een goed hooghe daek)を見つけなくてはならなかった。

その頃はしばしば教会に隣接した墓地でプレイした。ここは平らで堅かったからだ。そんな所でのボール遊びが聖職者の邪魔になったことはいうまでもない。ガラスは割れ、競技の騒音がしばしば神への祈りを捧げている最中に教会の中に響き渡った。

フランドルのアウデナルデに保管されている記録の中に 1338 年という初期の通達があって、墓地の近くでのカッシュ競技は禁止で、これを犯すと罰せられるとなっている。

「教会に隣接した墓地でカッシュ競技をすると 20 シリングの罰金を科す。そしてこの罰金を払えない者は、その額を納めるまで市門の出入りを禁ずる。」

(Men verbiet de Kache te speelne op te kerkhof op XX schel te mesdade. Ende die sine mesdaet niet ghelden en mach, men sal hem de Poert verbieden tes hi sine mesdaet bringt.)

他の理由からもそれは禁止された。世俗のお上は家臣がむしろ役に立つ武器の訓練をするのを見たがったのだ — 例えば弓道の練習とか。そこでフランス王シャルル V 世 (1364-80, 生誕 1338) は 1369 年に公示を出して、次のように市民にこの球技を禁じている。

「我が王国の防衛のための武器使用に際して、球技の訓練をしてはならない。」

(usages d'arnes à la defence de notre dit Roiaume)

その上貴族の殿方は自分たちの被後見人のモラルと財布の心配をした。そして彼ら自身が驚くほどに培った筈の競技への情熱を非難したのである。

だから市民たちはさし当たり公の広場なんぞに頼らざるを得なかったのに、この球技にとりつかれた貴族たちは、残りの住民たちにはオフリミットの、自分たち所有の競技場を思うままに使ったのである。

最初は貴族たちは、ポーム球技のために城の堀を利用した。堀はもはや防御施設として用いられることはなく、だから水が満たされてはいなかったからである。時には — 例えばヴィレール・コットレの城では — 中庭全部が競技場になったという。

後になるとこの球技のために城の敷地に特別な場所が設けられた — 例えばアンボワーズ⁷⁾の城で。

すでに早くからポーム球技に2種のヴァリエーションが出来上がっていて、数世紀後になってもまだ並立していたという。ほとんど原始的な条件下のもとに戸外でむしろ民衆的な「長いポーム球技」が行われていた。こちらの変種の大きな競技場は、60メートル、あるいは72メートルの長さのグラウンドでプレイする今日のカーツェンの中に保たれている。これに対して、上流社会の「短いポーム球技」は特にそのために設置されたグラウンドを自由に出来て、しかもこれにはしばしば屋根があった。でも市民たちはいつもいつも貴族たちに無抵抗に競技場を譲ってしまったわけではない。フランドルの色々な町で1405年頃裕福な市民たちは一種のテニスクラブを設立して、その会員たちはポーム球技を戸外やホールでプレイすることが出来た。そして1464年にはブリュージュの市民は多分テニス史上初めてのトーナメントを開催した。それには二つのチームが参加した…ホワイト・チームとブラック・チームと。

そのような市民の活動は好ましい目では見られなかった — 特にフランスとイギリスでは — 大目に見てもらえなかったことはしょっちゅうだった。

数多く出された王の勅令で威嚇的に書かれた処罰は、時には非常に厳しかった。1477年に出された通達はテニスに（そして他の競技にも）対して、3年間の懲役刑を規定していた。この時代の少なからぬ資料が訴訟を報告している。1396年にはカンタベリーでウイリアム・トレイという名の男が裁判にかけられた結果、有罪となった。彼は自宅で他の市民たちにテニス競技の機会を与えたという罪だったのである。

1450年にはオックスフォードで数人の市民が役所に引っ張り出された。皮なめし工トーマス・ブレイク、浴場主ウイリアム・ホワイト、靴屋ジョン・カリンたちは「聖書の上に手を置いて、テニスをしないことを無理矢理誓わされたのである。」

テニスをする市民たちの名が大抵は裁判所の記録にしか登場しないのに対して、大勢の貴族たちがそのスポーツへの打ち込みようのために賞賛されている。しかしその中の少なからぬ数がその早死というおかげをこうむっている。

中世の資料では、貴族に属するポーム球技愛好家の名はフランス、フランドルとイギリスで挙げられている — 明らかにこれに相応するドイツ語圏の国々の報告がない。（ひょっとすると我がドイツの歴史家たちは、中世、神聖ローマ帝国におけるテニスの調査をまだしていないのかも知れない。）

特に最初に名を挙げて触れるべき王たちのテニスプレイヤーは、フランスのルイ X 世（1314-16、生誕 1289）である。彼は同時に、このスポーツの最初の有名になった犠牲者である。即ち、彼は1516年にヴァンサンヌで闘争心をむきだして戦ったので — 彼のあだ名の嘩喧好き（Le Hutin）は示唆に富む — マッチの後に風邪を引き、肺炎で死んだ。

カスティリヤのフィリップ端麗公の場合も似たような経過を辿った。ブリュージュで生

まれ、フランドルで成長したので、早くから、この地方に普及したボーム球技を学ぶことになった。或る当時の目録から、彼が「ボーム競技に3本のラケットと、同じような目的のために4つの手袋を」用いたことが明らかとなる。1506年7月、カステイリヤ王に選出された後、彼はその任地に向けて旅立った。しかし逆風が彼の船をイギリスの岸辺へ押し流した。イギリス王ヘンリーVII世は、フィリップの不運を聞いて、客としてウィンザー城¹¹⁾へ招待した。両支配者は何で時間をつぶしたか？ むろんテニスである。

ヘンリーはテニス馬鹿だった。趣味のためには費用を惜しまなかったのである。高い賭け金を賭けて競技をした。王宮の家計簿から相手のプレイヤーに10ポンドまで支払ったことが明らかとなっている — だから驚くべき額だった。きっとあちこちで家臣たちはもういやになるほどこのような浪費をぶつくさ言ったであろう — しかしこのような非難の声が大きくなることは滅多になかった。ほんの僅か非難した人の一人は — 偶然ではなかったかも知れない — フランドルの人だった。ヤン・ヴァン・ブンデレは、14世紀の初期についての自分の年代記の中で、そっけなくこう書いている。「カーツェン球技、ダンス、トランプ…が侯爵のお気に入りの仕事だった。」侯爵とは、ブラバント公のヴェンツェルのことである。

しかしフィリップ端麗公に話しを戻そう。公はウィンザーでの遠征試合の後、旅を続けた。ブルゴスに到着すると政治的な対話を交わした — そしてたっぷりとテニスをした。しかしたっぷり過ぎ、カッカッとやり過ぎた。テニスの後で風邪を引いたのである。そしてルイX世と同じ運命を急いで辿ることになった。かくしてフィリップのテニスへの情熱が彼の支配期間を2ヶ月に縮めてしまった。フランスのシャルルVIII世(1483-98, 生誕1470)の悲しいケースも語らぬわけにはゆくまい。この王はアンボワーズで生まれて、死んだのもアンボワーズだった。テニスコートへの途中で、ある門の柱に頭をぶつけて骨折したのである。

テニス熱はもう中世にはバン屋であろうが、伯爵であろうが、遺伝体質となっていた。貴族の例を挙げると、フランス王ジャンII世(1350-64, 生誕1319)、その息子シャルルV世(1380-1422, 生誕1368)と孫のシャルルVI世(1380-1422, 生誕1368) — の3人の支配者がみんなボーム球技に血道を上げてどっぷりと借金漬けとなったのである。

テニス熱に浮かれたフランス人とフランドル人は、この球技を彼らの故郷の外へ知らせた。ドナート・ヴェルーティは、その『当年代記』(Cronica Domestica)で、1325年にある戦いに出征中のフランスの騎士たちがフィレンツェでテニスをして、結果的にイタリアにテニスを導入したと報告している。ブリテン島では奇妙なことにこの競技は、最初にスコットランドに出現する。13世紀の終わり頃だから、つまり14世紀が過ぎるうちにイングランドでもお馴染みとなるのだが、そのかなり前ということになる。謎解きをする、スコットランドとフランスとの結びつきがその当時すでに非常に密だった。その上に、その時代に支配していたスコットランド王アレクサンダー三世の母、マリー・ドゥ・クシ

がフランスの出身だったのである。

ドイツでテニス球技がお目見えするのは他より遅い。テニスについての最初の報告は15世紀半ばのものが保存されている。明らかにこの競技はフランダースとブラバントからまず近くのラインラント地方に達して、それにふさわしく^{ケーチェン}kaetschen (オランダ語 caetsen に由来) と呼ばれる。

テニスをする貴族たちの共同戦線に — 共和主義者たちとフェミニストたちはほっと安堵の息をつくことが出来る — 市民階級出身の女性がただ一人対峙する、即ちヘンネガウのマルゴートで、最初のテニスプロとなる。彼女は1402年モンス — その地区のポーム球技の多くある牙城の一つ — で生まれた。彼女の — 中世の状況からすると — 独特な経歴を追ってみよう。

彼女はすでに20才でテニスプレイヤーとして有名だった。派手好きで、競技好きにして、熱心なポーム球技プレイヤーであるブルゴーニュの善良侯フィリップは、才能豊かなマルゴートのことを知る。今日でも政治家たちが一流のスポーツマンと付き合いながらのように、フィリップも1427年にこの若い婦人を一種の出張旅行としてパリに來させた。この大都市で彼の随行員として彼女はブルゴーニュ宮廷の名声の高まりを助けることとなったのである。これに彼女はどうかや成功した。色々な同時代の報道記事の中に、男性の対抗者たちから勝ち得たこの御婦人の成果が記されている。記録者の一人の言葉を聞こう。

「この女史プレイヤーは非常に強いフォアハンドとバックハンドを打った。これがフランスで大きな評判となったのだ。…その方が楽だというので、みんな彼女に男性のユニフォームでプレイするよう勧めたのだが、— 彼女は断った。そしてポーム球技で稼いだかなりの額の金を持って、ヘンネガウに帰った。後にフランドルとブラバントに住んだ。だが最後にはナミュールのある修道院で出家した。一度も結婚することなく、乙女のままだった。」

黄金時代

16世紀と17世紀がテニスの黄金時代と名づけられているのは正しい。すでに15世紀にはほのかに見えていたものが、今や非常にはっきりとなるからである。つまり依然として貴族社会で最も楽しまれはしていたのだが、ポーム球技は — どのような変種となろうとも — 民衆スポーツとなったのである。お馴染みの禁止令が繰り返し新しく出されはしたのだが、テニスは今やどんと市民やら、農民やら、学生やらで楽しまれたのである。都市ではますます多くのテニスコートが発生する — 屋根なしのやら、屋根つきのやら。しょっちゅう — とりわけ田舎で — 道路とか広場で何とか間に合わせて、プレイした。どんな社会グループも独自のやりかたでテニスにおぼれたのである。即ち、城という贅沢な環境で、特別にしつらえた建物で — あるいは緑の牧場で。このような社会学的な分化からテニスの様々な変種が発展して来たのである。つまりここでは経済的な条件が — こ

の命題はカール・マルクス⁴⁾に関わって — 社会的な現象を決定する。16世紀と17世紀のテニスファンとその連中がプレイしていた場所をもっと詳しく見ることにしよう。

もう先にも言ったのと同じように、この時代にも競技者リストには数多くの王様たちの名が挙げられるのである — フランスとイギリスの王様たちの。これの列挙表の完成は退屈だから止めよう — ただ幾つかの名は挙げるだけの価値がある。

派手好みで、快活なフランスのフランソワ王(1515-47, 生誕 1494)も熱心なテニスプレイヤーだった。自分の大抵の居城に一時には幾つもの — コートを設けさせたのである。

このテニス馬鹿は、たとえ足下が堅い大地でなくても、お気に入りのスポーツがどうしてもしたかった。つまり多分この王は船の上に競技場を作らせた最初の人である。1533年、ルアーヴル港で80メートルの長さの巨大な「偉大なるフランソワーズ夫人」号の進水式が行なわれたのだが、上部甲板の真ん中にテニスコートがあって、日よけ天幕によって日差しから守られていたのである。近代になると、もっとささやかな規模ではあるが、旅客船で同じようなコートにお目にかかるのも希ではなくなった。

フランソワ I 世の息子たちは父親のテニス熱の遺伝子を受け継いだ。長男が — ルイ X 世と似て — あるマッチの後の風邪の結果もう 18 才の若さで死んだのに、その弟はかなり長い間ボーム球技に耽る機会に恵まれたのである。後の王アンリ II 世(1547-74, 生誕 1519)として、この王はチョッキと麦わら帽子の真っ白い出で立ちで競技に向かった。その頃から「白いスポーツ」と言われ出したのも、当然であろう。しかしアンリ II 世の場合も、サー・ウィンストン・チャーチル⁵⁾のスポーツは健康によくない、という主張の正しさを証明することになった。つまりこの王はある馬上試合の際に槍の傷がもとで死んだのである。

その息子、後のシャルル IX 世(1560-74, 生誕 1550)も同様にスポーツ年鑑に名を刻まれることになった。つまり 2 才で — これで恐らく歴史上最も若い — テニスプレイヤーとなった(少なくともラケットを手にした)。その母であった、とかく評価の分かれるメディチ家のカタリーナは、新しい髪型を作るといって頑張ったという。これはその当時のラケットのガットの張り方にヒントを得たもので、そこでラケット風ヘアスタイルと呼ばれた。ありとあらゆる生活領域にテニスに影響を及ぼし始めたわけである。

シャルル IX 世の後継者となった弟のアンリ III 世はこの家系のはみ出し者だった。女装が好きだったのである。当然、テニスには向いていなかった — あるスポーツ史家の主張するところでは — というのは推測にすぎない。

アンリ IV 世(1589-1610, 生誕 1553)は美女好みだった。このことをこの王は頻繁に催したテニスマッチでもはっきりと見せたものだ。そのプレイは観客の貴婦人方から賛嘆された — すると陛下は、競技場とか衆人環視の中で投げキッスとか別な御愛想でお返しをなさったのである。とはいえ、この王の魅力がボーム球技で得た儲けを国庫の中へ跡形もなく消えてしまわないように、その場で直ちに徴収するのに邪魔にはならなかった。つい

でに言うておくと、これと似た無慈悲さで競技の儲けを徴収したのは、この王のイギリス人の名付け親、ヘンリーⅧ世である。彼はその債務者を法的措置で追求したのである。

50年後にアンリⅣ世と同じように、もう一人のテニス馬鹿の貴族が競技の間にファンの御婦人方に囲まれていた。ボーフォール侯である。1649年5月14日に2000人をくだらぬパリの市場の女たちが、自分たちのアイドルがプレイする球技場に殺到したという。もっともこの数字はちょっと大きく見過ぎている気がするのだが。ひよっとするとこの記録者は、読者の印象を強くするために、いわゆる社会的乗数を導入したのかも知れない、即ち、例えば100人の市の商売女はイコール一人の貴婦人であるというふうに。

ここで最後におアンリⅣ世の息子のルイⅩⅢ世(1610-45、生誕1601)に触れておこう。この王にはもう少年時に定期的にパリの数多くの競技場でお目にかかることが出来たし、旅行中でもプレイのどんなチャンスも見逃さなかった。幾つかの事故までもその情熱を奪うことは出来なかった。ある時なんぞボールで歯が数本傷ついたし、またある時には右眼がやられたのだ。しかしそのスポーツへの熱意も、もう27才で痛風に苦しむことになる運命を食い止めてはくれなかった — しかもよりにもよってテニスのプレイ中に。

イギリス人の間でもテニス熱は16世紀にその最高点に達した。熱烈なプレイヤー — 二重の意味で — だったのがヘンリーⅧ世(1509-47、生誕1491)であった。この王はその頃使用が流行し始めたラケットを、少なくとも8本持っていた。

よく高い賭け金で勝負したものだ。あるたったの一日で — 1532年10月22日 — 彼はテニスで46ポンドを、そしてそれどころかサイコロ遊びで116ポンドを失った。何とたったの3年間でお手元金庫から3,250ポンドもの大金を賭け事の借金として支払ったのだ。テニス史の中で恐らく最も知られたマッチで、彼は1522年皇帝カールⅤ世と組んでオラーニエン王子とブランデンブルク辺境伯のペアーと戦ったのである。この王には例えばリッチモンドとかグリーンウイッチ、ウィンザー、ハンプトンコートなど、沢山のテニスコートが自由に使用できたのだった。

ホワイトホールに彼は4つ以上のコートを設置させた。とはいえ、テニスをする家臣たちの生活を苦しくさせてしまったのである。100ポンド以上の収入のある貴族と市民しか認可なくテニスコートを利用はできなかった — その他の者はライセンスを得なければならなかったのである。

後にはこの王はみっともないデブに膨れあがって、馬に乗るのに滑車でつり上げてもらわなくてはならなかったが、そうなる前は堂々たる美男子だった。ヴェニス大使 — イタリア人らしく視覚型の人間だった — が1519年にこの29才の君主のことをこう記している。

「この王は何にもましてテニスが好きだ。彼がテニスをしている姿を見るのは、この世で最も素晴らしい眺めである — その輝く皮膚がシャツの繊細な織り目を通して透けて見えるのだ。」

ヘンリーⅧ世の娘であるエリザベスⅠ世(1558-1605, 生誕1533)は父親と同様にテニス愛好家だったが — しかしただ観客としてだけだった。

スコットランドの支配者たちも — 例えばジェイムズⅤ世(1513-42, 生誕1512) — はこの白いスポーツを奨励したし、ジェイムズⅥ世(1567-1625, 生誕1566)はその著書『王の贈り物』(Basilikon Doron 1598)でテニスポーツの効用を根拠づけた。その中で彼はその当時4才だった息子のヘンリー王子にこう勧めている。

「肉体の訓練は若い王子にとって、それが器用さを促進し、健康を保持させる限り、大いに勧められるべきだと思う。王は、さもないと錆びつき、鈍磨しやすいのだから、その精神を訓練することが最も重要ではあるが、身体訓練と競技が大いに勧められる。この訓練はあらゆる悪の母胎である怠惰を追放し、辛苦に対して身体を鍛えてくれる…とはいえ、フットボールのような騒がしく、激しい競技は排除するが…予が汝に適度に鍛えることを推薦する訓練は、ランニング、跳躍、レスリング、フェンシング、ダンス及びテニスじゃ。」

この王らしい忠告はこの種のものとして初めてというわけではない。すでに中世に時折、テニスをただの暇つぶしの娯楽とは思わず、有用な肉体訓練として認識し、そのように記すこともあった。15世紀の初めにピサのクリスティーネは、フランスの第一王子のために書いた『統治の書』(Livre du corps de policie)の中でボーム球技をするよう勧めていた — でもやり過ぎず、ほどほどに。

— 世紀後にユマニストのロツテルダムのエラスムス⁶⁾が『対話集』(Colloquia Familiaria 1533)の中で、ボーム競技の健康促進の効用を賛嘆している — とりわけ冬期に：

「テニス競技ほど身体のある部分を鍛えてくれるものはない — でも夏よりも冬に。」

(Nulla res melius exercet omnes corporis partes, quam pila palmaria, sed aptior hiemi quam aestati.)

「ボーム球技の親方」(Maîtres paumiers)のギルド⁷⁾の会則(1571)でフランス王シャルルⅨ世は、この球技が如何に健康によいか — 「王にとって、貴族、紳士方およびその他この競技を行う高貴な人々にとって」 — と強調している。

一般にルネッサンスの頃は少なくとも上層階級の人々は我々が通常想像しているよりもっと健康を意識していた。この時代の或る人が描いたフォンテヌブロー公園の注目すべき絵図(1571年)には、スポーツや競技をしている沢山の人々が見える — とりわけ、ドイツならむしろ海辺の保養地で見かけるような、体育の集団訓練をしている人々が見受けられる。

だがイギリスに戻ろう。他のその頃の人々と同じように、トーマス・エリオットはそのヘンリーⅢ世に捧げた君主の書『支配者の本』(The book of the Governor) (1531)で、

テニスコートでは、節度のある運動をするよう忠告している。

この種の勧告は残念ながら、ラケットを振る王様の何人かには守られたことがない。このテニス熱狂者の一人がすでに上に挙げたジェイムズVI世の長子ヘンリー王子だった。「テニスでは」と1760年にその伝記作者は非難の思いを響かせながら断定している。「この王子は節度を知らぬ…彼はしばしば3時間も4時間もプレイをしたものだ。」18才のヘンリー王子が高い熱にもかかわらず長いマッチを — 上着を脱いで — 戦い抜いて、その後間もなくこのような軽率な行動が原因で死んだ、とここで実例として報告している。

その弟、後のチャールズI世(1615-49, 生誕1600)は早くからテニス教育を受けた — 皇室テニス官であるジョン・ウェップという男から。1649年に不幸なチャールズI世は処刑され、そしてピューリタン⁸⁾が1660年まで権力を握った。偶像敵対者で、演劇、競技に敵対するこのリゴリストたちはもちろんテニスをも軽蔑した。クロムウェルの支配下では、だから多くのコートが軍事的に利用された。テニス競技は絶滅したわけではなかったが、見るも哀れに制限された。

だが他方でこの時代には — いわばそれとの均衡を取った形で — テニスは新世界への道を辿った。アメリカでのこの競技の最初の証拠は、1659年に見出される。しかも — よくあることなのだが — 或る禁止令の中に納められているのだ。この禁止令は、ある宗教上の祭日を保護するために、ニューヨーク知事だったバーター・シュトウイヴェサントによって発令されたものである。

註

- 1) 明晰性 フランス語 *clarté*。かつてフランス語は世界中で一番明晰な言語であると自認していた時代があって、現代でもそのように自慢するフランス人が少なくないのをからかったもの。
- 2) セーヴルの原メーター セーヴルはパリの西郊外、ヴェルサイユへの経路にあるセーヌ河畔の町。1875年に国際度量衡局が置かれて、メーター原器が所在。国際的には、むしろセーヴル陶器の方で知られている。
- 3) イギリスの神秘劇 (mystery play) cycle playともいう。13世紀から16世紀頃まで盛んであった宗教劇で、かつてはmiracle play (奇蹟劇)といわれていた。聖書の中の話に基づくものと聖母や聖徒たちの伝説に題材を取ったものがある。一つの独立した戯曲というわけではなく、聖書の物語や聖人の生涯を描いたエピソードが連続するcycleの形を取っていて、町の各ギルドがそれぞれ一つの話を担当した。その際、例えば造船業者のギルドがノアの方舟の話を引き受けるなど関連性があったらしい。
- 4) カール・マルクス (Karl Marx 1818-1883) ドイツのトリアー生まれ。ライン新聞の編集などしてケルンに暮らしていたが、1849年ロンドンに移り、生涯を過ごした。エンゲルスと共同して科学的社会主義の創始者となる。ヘーゲルの観念的弁証法を唯物論的に転換して、主著『資本論』を執筆したことは余りにも有名。
- 5) サー・ウィンストン・チャーチル (Sir. Winston Churchill, 1874-1965) 第二次大戦中のイギリス首相。アメリカのトルーマン、ソ連のスターリンらとドイツのポツダムで会談を行って日本とドイツの戦後処理を協議したことはよく知られている。いつも葉巻を啜えた、ブルドッグに似た独特の風貌に人気があった。1953年ノーベル平和賞受賞。
- 6) エラスムス (Erasmus von Rotterdam) ルネッサンス期の最大の知性といわれた人文主義者。教

会権力とその不寛容を徹底的に批判、僧侶階級を嘲笑して宗教改革の基盤を準備したが、最後まで改宗はしなかった。

- 7) ギルド (Zunft) 同一の町の同種の手職を営む職人が形成する同業組合。職人の加入は大抵の場合、強制的だった。12世紀に、いわゆる都市貴族に対抗して、これとの長い戦いの後に、町の行政への参加権を獲得した町が多い。会員同士には経済的な保護を与え、また製品の品質管理を行う等、独自の慣習が少なくない。1868年、北ドイツ連盟で職業の自由権が採択されて、その権利を失った。

- 8) ピューリタン (Puritan)、クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658)

ピューリタンはイギリスにおけるキリスト教清教主義。カルヴァン派の一派で、国教主義を奉ずる。スチュアート王朝の王チャールズ I 世の議会無視の政策に不満を抱いて、1642年、叛乱を起こした。その中心人物がクロムウェルで、王党派と対立、ついには革命にまで発展して (清教徒革命)、1649年チャールズ I 世を処刑するまでに至った。しかしクロムウェルの死後、1660年王党派が反革命を起こして王政復古となった。

The Short History of Tennis

Theo Stemmler

YUZO TSUNETO¹⁾, HAJIME OHYA²⁾

*1) College of Life Science, Kurashiki University of Science and the Arts
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

*2) Educational Support Center, Kurashiki University of Science and the Arts
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2011)

Starting with a question when tennis was born, the long process of tennis is described in this book. Even though it is certain to be a history book in that sense, this book is interesting not to trace linearly the times of tennis like a textbook of history. From the beginning this story goes along stirring the imagination of readers to unexpected direction, with description that almost all the sports were born in England though tennis in France just like hockey in China and Golf in Scotland, even though Wimbledon is in England. Even those who are not surprised to hear having hit a ball with a hand would be hard to believe to have served a ball to the roof of cloister.

By description of influence of tennis, for example, tennis was forbidden sometimes because it was in fever, passion for tennis was occurred by Mendelian factor, and hairstyle became fashionable by inspiration from the way of stringing a racket, it seems that this would improve the image of people who made up historic image by reading only the history of war.

But naturally the fate had its ups and downs in this world. The description of the process is interesting, at the first time, from age of birth in the Middle Ages to golden age passing epidemic period. It is possible to expand the image from the popular name, such as Queen Elizabeth or Henry IV who loved the beauties, although it may be bothersome that many kings or aristocrats appear.